

79

## 幻の宋版『孫真人玉函方』——金沢文庫旧蔵本

小曾戸 洋, 長野 仁, 星野 卓之, 天野 陽介

北里大学東洋医学総合研究所

〔緒言〕 11世紀から13世紀後半にかけて中国で出版されたいわゆる宋版医書の現存品は稀少で、従来それらの所在は調査報告されており、未知の宋版医書が新出することはまずありえないというのが一般常識であろう。ところが最近この常識を覆す新知見があったので報告する。

〔経緯〕 平成20年2月2日～3月16日、千葉県の館山市立博物館において特別展「村の医者どん」が開催され、56頁に及ぶ図録が出版された。期間中、演者らはこの催事に気付かなかったが、長野が平成23年4月初、同図録を入手。27頁目掲載の写真、『孫真人玉函方』には金沢文庫の印があり、宋版医書らしいことを小曾戸に急報した。驚いた小曾戸は館山出身の星野を介し、その友人を通じて特別展を企画担当した岡田晃司主任学芸員に周旋を依頼。当該本の所有者である上野和子氏に原物の閲覧を願った。岡田氏からの返答は、上野氏は所有品の開示はすべて快諾されたが、当該本のみは残念ながら間違えて破棄した由であった。落胆しつつも一縷の望みを託して平成23年5月29日、岡田氏の案内で小曾戸・星野・天野・町が上野氏宅を訪問。他の古医学資料の数々を披見、写真撮影したが、目的の当該本はついに発見することはできなかった。

〔上野家〕 所有者の上野家については図録に次のようにある。「里見家家臣の家柄で、里見氏没落後に長須賀村で帰農した弥七郎信国が、金沢文庫蔵書の医書『孫真人玉函方』を手に入れて村人の治療をしたと伝えられている。手に入れた医療知識を地域で活かしたということだが、本格的な医者どんは、元禄地震のあと医師を志して江戸で幕府の侍医藤本立策（立泉カ）に師事した才庵義明（1760年没、60歳）が、上野家の初代医師となった。以降、主馬（助明）—主馬（知明）—主馬（義泰）—良助（清泰）—主馬（義寧）—隆卿（義弼）と続き、明治34年（1901年）に上野医院を開いた幹太郎（1941年没、79歳）まで8代にわたって長須賀で医業を継いだ。主馬義泰（1830年没、63歳）は白河藩波左間陣屋（館山市）の陣医となり、『麻疹捷方』を著したという。」（岡田氏執筆）

〔考察〕 当該品に関して残された情報は、図録作成にあたって同博物館が撮影したカラー写真（序文後半と目録初の見開き）1葉が唯一である。他の部分の写真やコピーは一切残されていない。『宋史』芸文志に「孫思邈千金方三十卷。千金髓方二十卷。千金翼方三十卷。玉函方三卷」とある。当該『孫真人玉函方』はまさしく『宋志』の「玉函方三卷」に相違なからう。刊本となったことはこれまで全く知られておらず、本写真によってはじめて判明した事実である。書影（圓字など）から本版は南宋の刊本と鑑定しうる。丁数は不明で、巻上のみ1冊か、上中下合1冊であったかは断言できないが、聞くところの厚さ（1センチ弱か）からすると後者であった可能性が高からう。「金沢文庫」印は従来知られている真印8種のうちの一つ。宋版『備急千金要方』（民博・重文上杉本）のものと同印であり、金沢文庫旧蔵本であることは疑いを容れない。同書がいかなる経緯で上野家に入ったか。それを示唆する資料は上野家には全くない。詳細は略すが、金沢文庫→直江兼続→上杉家→里見家→上野家というルートも一考の余地があるかと思う。

〔結語〕 新出の南宋版『孫真人玉函方』の存在を確認しつつも、僅かの時間差で現物を目睹する機会を逸し、見開き1カットの写真のみを残したままおそらく亡失したであろうことは痛恨の極みというほか言葉がない。せめて貴重な文化財の存亡顛末を記録に留めんがため、本発表に及んだ。